団地の中に 小さな図書室 つくりました

建築学生たちが営む
子育て支援スペース

105

一つ山荘
絵本サロン
105

築３０年を超える団地の一室に、**まるで"秘密基地"**のような、建築学生たちが営む子育て支援スペース **『一つ山絵本サロン 105』** を開く。年季が入った玄関扉を開ければ、天井まで続く木の飾り棚が廊下から居間へ連なり、図書館から借りた**１８０冊の絵本**が並ぶ。絵本サロンの運営を通じて、学生が団地で暮らすように過ごし、住民と関わり合いながら、団地の課題や魅力を分析し、団地の可能性を発信していく。

０１　ターゲット

ターゲットは若い子育て世帯。現在の公共住宅団地は高齢単身者が増え、空き室が増えている。この状況を改善するため、若い子育て世代が団地を訪れる機会を作るための絵本サロンの運営を行う。絵本サロンが地域の拠点となり、いろんな世代の方の交流の場をめざす。

０２　活動方針

2021 年度　研究室内スタディ

2022 年度　活動報告会

2023 年度　施工開始

2024 年度　絵本サロン開始

＜プロジェクトへの向き合い方＞
・時間的猶予がたっぷりあること
・途中でアイデアや修正を加えられること
・実験的な試みにトライできること

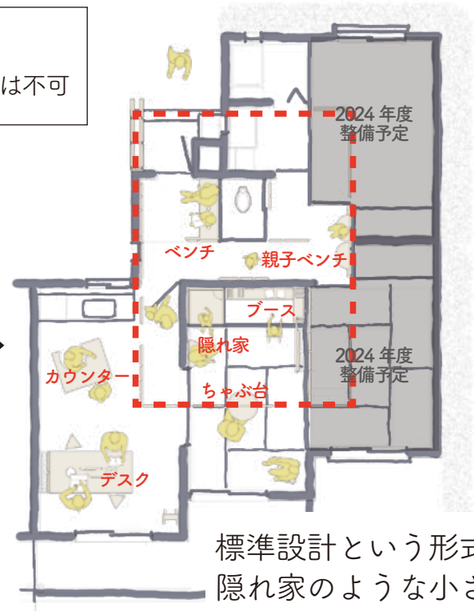
そんな環境を大切に、
企画から設計、施工、運営までを学生主体で取り組む

０３　立地

団地の文脈
戦後住宅政策の中心手段の一つは、公共住宅団地の開発であった。高度成長期に多くの若い人たちが農村から都市に移り住んだ。公共住宅団地は、その受け皿となった。いま、その公共住宅団地には、高齢単身者が増え、空き室が増えている。
この状況を、どのように改善し、維持すべきか。
戦後に蓄積してきた公共住宅ストックは、社会安定を下支えする貴重な資源である。社会資源としての公共住宅の役割を問い直し、新たな方向性を見出すことが、課題である。

０４　計画

・賃貸、現状復旧という条件
・壁を抜くような「引き算」の操作は不可



公共住宅団地がアプリオリにもつ標準設計という形式を崩すことから考えた。**絵本サロンエリアを間取りの中心に据え、その境界にスリット壁を立てる「足し算」の操作**を施した。決して広くはない間取りをさらに壁により細分化することで、小さなニッチをあちらこちらに発生させ、訪問者にとってのささやかな居場所になることを期待する。

標準設計という形式を崩すことで
隠れ家のような小さな居場所をたくさんつくる

０５　学生の DIY による家具たち

建物に一切傷をつけない工夫や作業効率のための合理性など、自ら手を動かすことで設計の解像度が高められ、図面を作成するだけではわからない気づきが得られる。

06　空間コンセプト　「団地の中の小さな図書室　秘密基地のようなとっておきの場所」

暮らしの観察
サロンの運営主体は、大学で建築を学ぶ学生たちだ。そこで、自らが参画した物件の在り方を検証する。「子育て支援スペース」は果たして、子育てを支援できるのか？住まいと地域との接点づくりは、日常の延長にそのきっかけがあるのだと思う。だから、ここで暮らすようにふるまいながら、「団地の環境」を感じ、考えてみる。

廊下から入り口をみる

入り口
木のスリットサインと黄色の看板がお出迎え。玄関の中には囲われた小さな空間。孔の空いたベンチの下には絵本たちが隠れている。

どうぞのボックス
オープン時には、誰でも持ち帰って、誰でも持ってきて入れられる。

メインテーブルからみた絵本サロン全体風景

運営する学生と絵本サロンを訪れる利用者たちとの交流
運営する学生と、毎週のように通ってくれるこどもたちとのつながりが生まれてきている。学生たちはここで暮らすようにふるまいながら、団地内の住民の方や地域の方との接点づくりをめざす。

可動式のカウンター

可動式のカウンター
黄色い、孔の空いたダイニングテーブル

廊下本棚

学生とこどもたちとの交流

絵本を選ぶこどもたち

絵本を読むこどもたち

カーテンと植物

看板犬と切り株スツール

07　活動タイムライン

2021 年より続いている研究室の継続プロジェクトである。毎年度、学部４年生が中心となり、検討を重ねながら学生主体で取り組んでいる。

現地調査

名古屋市への現状報告会

『一つ山絵本サロン 105』運営開始

2021 年から開始

2021 年～

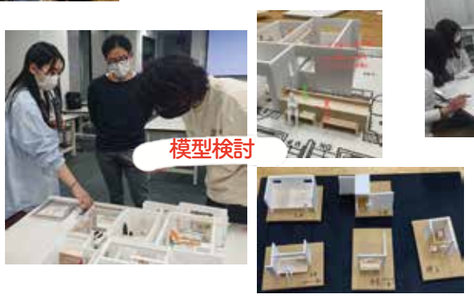
2022 年

2023 年

2024 年 3 月

今後

研究室内スタディ



施工開始

イベント利用など

今年度、残りの２部屋と庭の整備、
来春にグランドオープンを予定

学生が暮らすように運営する中で、
サロンの存在が認知されていき
多様な人とのつながり・新しい展開が
起きることを期待する